

## 集団内の対人選好システムに関する研究 (2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 雅夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/20579">http://hdl.handle.net/2297/20579</a>

## 集団内の対人選好システムに関する研究(2)

太田 雅夫

### A Study on the Interpersonal Preference System in Groups (2)

Masao OHTA

#### 目 的

対人選好システムを解明しようとするとき、対人的感情関係とその認知に焦点を当てて分析を進める方法は、一つのアプローチの仕方といえるだろう。

従来からバランス理論においては、主として2人の人間と非人間的対象を含む関係を問題としてきたが、それは人間に対する感情関係と、非人間的対象に対する態度にかかわるものであった。しかし、集団内の対人選好システムの解明にとっては、人間を対象とする2者関係および3者関係を取り扱うことが可能でなければならない。

この研究は、「集団内の対人選好システムに関する研究(1)」に引き続き、人間を対象とする2者または3者間の感情関係とその認知を中心として、それらの関連を解明することをねらいとする。

ここでは先の研究と同様、感情関係とその認知との関連をみるため、各変数間の相関分析を試みることにした。

#### 方 法

被調査者；被調査者は、附属小学校5年2組と3組の児童で、2組は男子19名、女子19名、3組は男子16名、女子18名。合計72名であった。調査日に欠席の者は調査対象から除外した。

調査用紙；調査用紙は、男子用、女子用各3

問ずつからなり、第1問では本人と同性の他者に対する好悪感情を、第2問では、同性の他者の本人に対する好悪感情の認知を、第3問では、同性の他者相互に対する好悪感情の本人による認知を調べた。男子用の場合、本人の他者に対する好悪感情は、「この組(クラス)のお友達(男子)について、あなたは、どう思っていますか。お友達一人一人について教えてください。(○で数字をかこんでください)」であった。他者の自己に対する好悪感情の認知は、「この組(クラス)のお友達(男子)の一人一人から、あなたはどう思われているのでしょうか。(○で数字をかこんでください)」であった。また、他者の別の他者に対する好悪感情の認知は、「あなた以外のお友達(男子) どうしは、お互いにどう思っているのでしょうか。」であった。各質問とも、とても好き(4)、好き(3)、どちらかというところ好き(2)、好きでもきらいでもない(1)、その他(0)の5段階の評定をさせた。「その他」は、あらゆる段階の「きらい」を総て含むものとした。好きが3段階の評定であるが、きらいは「その他」という表現のもとにまとめられているが、これは学級成員に対する嫌いという評定が、人間関係や学級指導等の点で悪影響を残さないようにという配慮からであった。結果の分析に際しては、3点、2点、1点、0点、-1点の段階点を用いた。

$i$ の $j$ に対する好悪感情は $C_{ij}$ 、 $j$ の $i$ に対する好悪感情の $i$ による認知は $C_{ji}$ 、 $j$ の $k$ に対する好悪感情の $i$ による認知は $C_{ijk}$ と表わすことができ

る。以下では、これらの変数を3次元の配列として扱い、配列要素名をC(i, i, j), C(i, j, i), C(i, j, k)とするが、C(i, i, j)はC(i, j)と簡略化して示すことにした。

調査日に欠席した者に対する出席者の好悪感情、出席者に対する欠席者の好悪感情の出席者による認知、欠席者→出席者および出席者→欠席者に対する感情関係の出席者による認知等に関するデータは分析から除外した。

調査年月；調査は1993年3月に実施した。

結 果

(1) iのjまたはkに対する感情関係、jのiに対する感情関係のiによる認知の平均および標準偏差

(A) C(i, j) およびC(i, k) の水準別C(i, j, k) の平均および標準偏差  
jのkに対する感情関係のiによる認知C(i, j, k) の平均および標準偏差をC(i, j), C(i, k) の水準別に示したのがTable 1である。水準は-1, 0の水準(< 0)と1, 2, 3の水準(> 1)に2分することにした。

Table 1 C(i, j) およびC(i, k) の水準別C(i, j, k) の平均および標準偏差

(2-M)		
	M	SD
C(i,j)<0,C(i,k)<0	.596	1.130
C(i,j)>1,C(i,k)<0	.584	1.017
C(i,j)<0,C(i,k)>1	.865	1.087
C(i,j)>1,C(i,k)>1	1.219	1.024
(2-F)		
	M	SD
C(i,j)<0,C(i,k)<0	.795	1.205
C(i,j)>1,C(i,k)<0	.774	1.031
C(i,j)<0,C(i,k)>1	1.372	1.058
C(i,j)>1,C(i,k)>1	1.734	.906

(3-M)		
	M	SD
C(i,j)<0,C(i,k)<0	.961	1.205
C(i,j)>1,C(i,k)<0	.613	1.023
C(i,j)<0,C(i,k)>1	1.092	1.049
C(i,j)>1,C(i,k)>1	1.357	1.001
(3-F)		
	M	SD
C(i,j)<0,C(i,k)<0	.737	1.090
C(i,j)>1,C(i,k)<0	.603	1.136
C(i,j)<0,C(i,k)>1	1.189	1.159
C(i,j)>1,C(i,k)>1	1.479	1.001

注) 2-Mは2組男子、2-Fは2組女子、3-Mは3組男子、3-Fは3組女子である。

C(i, j) およびC(i, k) の水準別にC(i, j, k) の平均および標準偏差をみると、平均は水準が高くなるに連れて、大きくなる傾向がみられる。C(i, j) やC(i, k) が1以上では、C(i, j, k) が最も高い。これはC(i, j, k) がC(i, j) やC(i, k) に連動するからかもしれない。標準偏差は、3-Fを除いては、水準が高くなるに連れて小さくなるという傾向がみられる。C(i, j) やC(i, k) が共に0以下の場合より共に1以上になる場合はC(i, j, k) が小さい。第2位の水準と第3位の水準の順序は便宜的なものであるが、C(i, j, k) は第3位のものが大である。

(B) C(i, j) およびC(i, j, k) の平均および標準偏差

Table 2は、jのiに対する感情関係のiによる認知C(i, j, i)とiのjに対する感情関係C(i, j)について平均および標準偏差を示したものである。

C(i, j) とC(i, j, k) とを比較すると、C(i, j) は平均、標準偏差ともC(i, j, k) より大きい。感情関係がその認知よりも平均が大きいことは、自分が相手に対して持つ好感情は、相手が自分に対して持つと認知されるものより

Table 2 C (i, j, k) とC (i, j) の平均および標準偏差

(2-M)		
	M	SD
C (i, j, i)	.939	1.014
C (i, j)	1.211	1.140
(2-F)		
	M	SD
C (i, j, i)	1.120	1.049
C (i, j)	1.661	1.058
(3-M)		
	M	SD
C (i, j, i)	1.054	1.045
C (i, j)	1.412	1.162
(3-F)		
	M	SD
C (i, j, i)	.778	1.005
C (i, j)	1.229	1.163

好意的であることを示している。感情関係は相手によって大きな差異を示し、これが標準偏差となって現われているが、相手が自分に対して持つと認知されるものは、それほど弁別されていないことを示していると思われる。

(2) iのjまたはkに対する感情関係とjのkに対する感情関係のiによる認知との関係

(A) C (i, j) の段階別C (i, k) とC (i, j, k) との相関係数および回帰係数

Table 3はC (i, j) の段階別にC (i, j, k) とC (i, k) の相関係数およびC (i, k) に基づくC (i, j, k) の回帰係数を示したものである。C (i, j) が-1から3へと大きくなるに連れて、相関係数および回帰係数B 1は大きくなる。この傾向はすべての学級の男子女子集団に共通している。C (i, j) が-1の水準では回帰が有意とならないことが多いが、それ以外の水準ではすべて有意である。

これは、自分が好意的なjは他者kに対して、

Table 3 C (i, j) の段階別C (i, k) とC (i, j, k) との相関係数および回帰係数

(2-M)					
R(i,j,k)(i,k)	DF	B 1	B 0	F	
C(i,j)=-1	.037 406	.035	.756	.444	
C(i,j)=0	.231 1273	.226	.510	65.254**	
C(i,j)=1	.290 1613	.255	.664	88.548**	
C(i,j)=2	.303 1715	.286	.689	138.439**	
C(i,j)=3	.479 797	.477	.544	233.540**	
(2-F)					
R(i,j,k)(i,k)	DF	B 1	B 0	F	
C(i,j)=-1	.112 168	.112	.568	2.146	
C(i,j)=0	.213 848	.217	1.020	43.336**	
C(i,j)=1	.273 1001	.256	1.020	62.284**	
C(i,j)=2	.402 2548	.384	.889	410.144**	
C(i,j)=3	.551 1239	.506	.858	384.787**	
(3-M)					
R(i,j,k)(i,k)	DF	B 1	B 0	F	
C(i,j)=-1	-.056 208	-.050	1.169	.420	
C(i,j)=0	.179 516	.175	.813	15.745**	
C(i,j)=1	.277 1020	.240	.776	47.707**	
C(i,j)=2	.359 894	.335	.744	100.761**	
C(i,j)=3	.443 712	.396	.703	110.776**	
(3-F)					
R(i,j,k)(i,k)	DF	B 1	B 0	F	
C(i,j)=-1	.237 254	.220	.849	11.129**	
C(i,j)=0	.262 1326	.255	.720	88.247**	
C(i,j)=1	.310 1134	.299	.686	103.755**	
C(i,j)=2	.408 1390	.401	.792	260.435**	
C(i,j)=3	.480 782	.479	.673	232.501**	

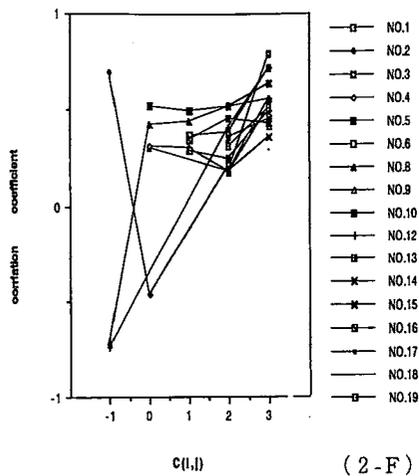
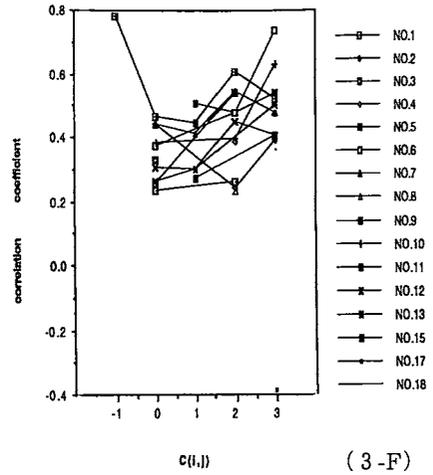
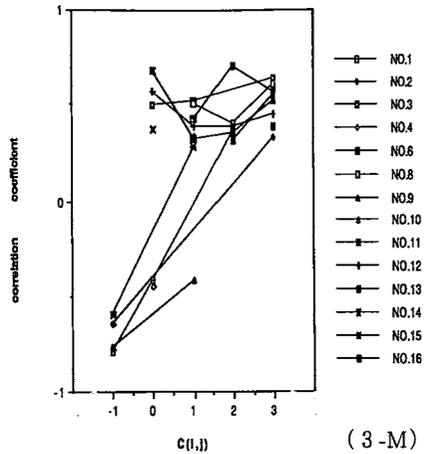
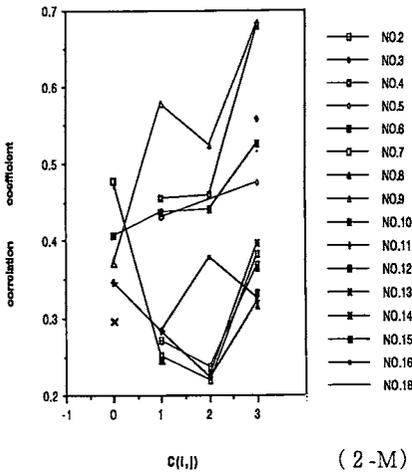
自分のkに対する感情関係C (i, k) と同様の感情関係をもつと認知C (i, j, k) し勝ちであり、自分がjに対して好意的になればなるほどこの傾向が強いということを示している。自分が好意的でも非好意的でもないjに関しても、この傾向は認められ、時には自分が非好意的なjに関しても弱い関連が認められる。

(B) 個人ごとのC (i, j) の段階別C (i, k)

とC (i, j, k) の相関係数

Fig. 1 は各学級の男子および女子集団のC (i, j) の段階別のC (i, k) とC (i, j, k) の相関係数を比較的著しいものについて個人ごとに示したものである。個人によってかなり相関係数に差が大きく、C (i, j) の段階が高まるに連れての相関係数の上昇傾向も単調ではないが、C (i, j) が正の場合には、その増加に応じて相関係数が上昇する者が多い。C (i, j) が-1の場合には、全般に低い相関係数を示す者が多いが、高い相関を示す者も散見される。

Fig.1 C (i, j) の段階別C (i, k) とC (i, j, k) の相関係数



(C) C (i, k) の段階別C (i, j) とC (i, j, k) の相関係数および回帰係数

C (i, k) の段階別にC (i, j) とC (i, j, k) の相関係数および、C (i, j) に基づくC (i, j, k) の回帰係数を示したのがTable 4である。

ここでもC (i, k) が高くなるに連れて相関係数および回帰係数B1は上昇する傾向がみられる。C (i, k) が-1や0の低い段階では相関係数や回帰係数B1は小さく、負の値の場合が多い。C (i, k) が高い場合、正で有意な回帰となることが多い。

これは自分の好意的な相手kに対しては、自分の好意的な他者jは好意的であると認知し勝

ちであるということを示している。しかし、自分が好意的であるとはいえない相手kに対しては、自分が他者jに対して持つ感情関係とは異なる感情関係を持つと認知し勝ちである。すなわち自分の好意的なkに対しては、自分の好意的な者はだれでも好意的であると認知するが、自分の好意的ではないkに対しては、自分の好意的な他者は非好意的、自分の非好意的な他者は好意的であると認知する傾向があることになる。

Table4 C(i, k)の段階別C(i, j)とC(i, j, k)の相関係数および回帰係数

(2-M)					
R(i,j,k)(i,j)	DF	B 1	B 0	F	
C(i, k) = -1	.185	194	-.164	.481	4.256*
C(i, k) = 0	.025	519	.023	.635	.210
C(i, k) = 1	.163	807	.138	.730	11.169**
C(i, k) = 2	.183	981	.163	.875	21.344**
C(i, k) = 3	.338	396	.299	1.065	31.036**
(2-F)					
R(i,j,k)(i,j)	DF	B 1	B 0	F	
C(i, k) = -1	.064	77	.063	.101	.294
C(i, k) = 0	-.072	428	-.070	.894	2.036
C(i, k) = 1	.050	454	.039	1.290	.429
C(i, k) = 2	.184	1290	.172	1.322	34.504**
C(i, k) = 3	.304	648	.257	1.466	33.954**
(3-M)					
R(i,j,k)(i,j)	DF	B 1	B 0	F	
C(i, k) = -1	-.327	91	-.283	.636	6.116*
C(i, k) = 0	-.153	205	-.134	.791	2.849
C(i, k) = 1	-.036	505	-.030	1.066	.321
C(i, k) = 2	.094	443	.078	1.313	1.891
C(i, k) = 3	.171	426	.151	1.415	7.773**

(3-F)					
R(i,j,k)(i,j)	DF	B 1	B 0	F	
C(i, k) = -1	-.047	155	-.046	.547	.310
C(i, k) = 0	.024	621	.024	.705	.364
C(i, k) = 1	.027	525	.025	1.021	.307
C(i, k) = 2	.232	696	.225	1.152	34.810**
C(i, k) = 3	.233	441	.219	1.352	19.909**

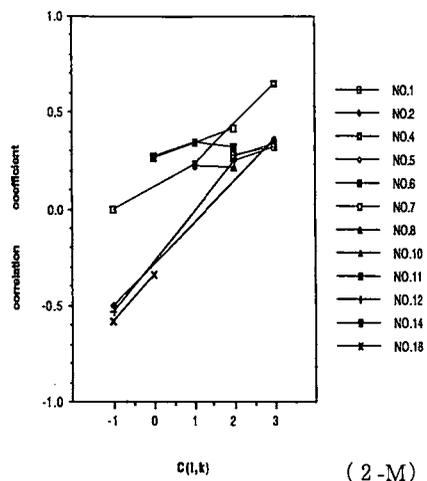
(D) 個人ごとのC(i, k)の段階別C(i, j)とC(i, j, k)の相関係数

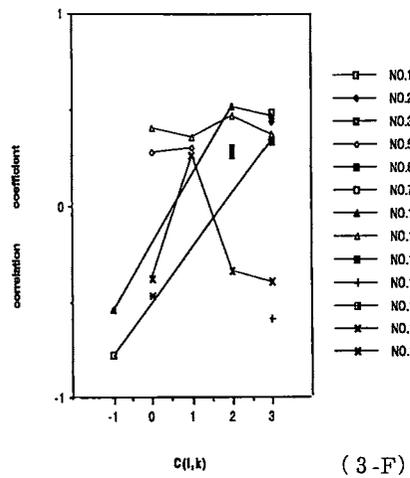
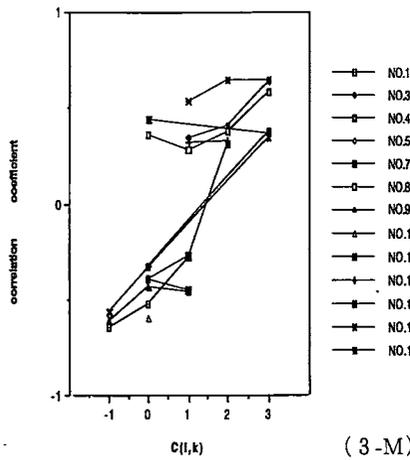
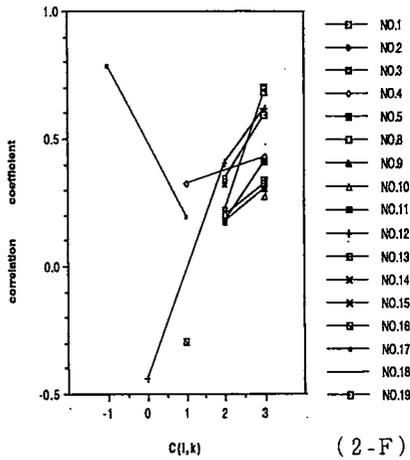
この関連を個人ごとにみたのがFig. 2である。C(i, k)の段階別にC(i, j)とC(i, j, k)との相関係数の顕著なものを示している。全般にC(i, k)が-1から3へと増加するにしたがって相関係数も大きくなる傾向がみられる。

(E) C(i, j)およびC(i, k)の水準別C(i, k)とC(i, j, k), C(i, j)とC(i, j, k)の相関係数および回帰係数

Table 5はC(i, k)とC(i, j, k), C(i, j)とC(i, j, k)の相関係数および回帰係数を示したものである。

Fig. 2 C(i, k)の段階別C(i, j)とC(i, j, k)の相関係数





$C(i, k)$  と  $C(i, j, k)$  との相関係数および回帰係数は、すべての水準で正であり、回帰も有意となることが殆どである。

第2水準と第3水準間では逆になることもあるが、水準が高くなると相関係数および回帰係数の高くなる傾向がみられる。少なくとも、 $C(i, j) < 0$ ,  $C(i, k) < 0$  より  $C(i, j) > 1$ ,  $C(i, k) > 1$  の水準の相関係数が一段と高いということはいえる。

$C(i, j)$  と  $C(i, j, k)$  との相関係数および回帰係数は、 $C(i, k)$  と  $C(i, j, k)$  との場合より低くなるのが殆どで、負の値を示すことも多い。あまり明瞭ではないが水準が高くなるに連れて、高くなる傾向もみられる。これがすべての学級で正となるのは、 $C(i, j) > 1$ ,  $C(i, k) > 1$  の水準に限られている。

要するに、 $i$  の感情関係に応じて  $j \rightarrow k$  の感情関係の認知も変化する傾向がみられる。そして、 $i \rightarrow k$  の感情関係と連動する傾向が強い。これも自分の好意的な相手に対しては、多くの者に好意的であってほしい、特に自分が好意的な他者からは好意的であってほしいという期待が反映するものと思われる。

(F)  $C(i, k)$  と  $C(i, j, k)$ ,  $C(i, j)$  と  $C(i, j, k)$ ,  $C(i, j)$  と  $C(i, k)$  の偏相関係数

3者間にみられる3個の偏相関係数を見ることにしよう。Table 6は、 $C(i, j)$  と  $C(i, k)$  の水準別  $C(i, k)$  と  $C(i, j, k)$ ,  $C(i, j)$  と  $C(i, j, k)$ ,  $C(i, j)$  と  $C(i, k)$  の偏相関係数を示している。どの水準においても  $C(i, k)$  と  $C(i, j, k)$  の偏相関R12は、 $C(i, j)$  と  $C(i, j, k)$  の偏相関R13より大きい。

$C(i, j)$  と  $C(i, k)$  の偏相関係数R23は、 $i$  が他者  $i$  と  $j$  に対する感情関係の相関であるから、殆どないと考えられるが、 $C(i, j) < 0$ ,  $C(i, k) < 0$  の水準では、偏相関係数はR12, R13よりむしろ高い。

Table 5 C (i, j) および C (i, k) の水準別 C (i, k) と C (i, j, k), C (i, j) と C (i, j, k) の相関係数および回帰係数

(2-M)					
C(i,j) < 0, C(i,k) < 0	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.063	488	.162	.639	84.236**
C(i,j,k);C(i,j)	-.088	488	-.225	.536	163.814**
C(i,j) > 1, C(i,k) < 0	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.209	1191	.504	.702	1829.444**
C(i,j,k);C(i,j)	-.025	1191	-.034	.645	2.557
C(i,j) < 0, C(i,k) > 1	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.189	1191	.275	.376	198.725**
C(i,j,k);C(i,j)	.028	1191	.073	.882	41.538**
C(i,j) > 1, C(i,k) > 1	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.221	2936	.308	.660	569.920**
C(i,j,k);C(i,j)	.111	2936	.154	.940	136.913**
(2-F)					
C(i,j) < 0, C(i,k) < 0	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.156	198	.521	.876	610.930**
C(i,j,k);C(i,j)	.133	198	.445	.864	441.967**
C(i,j) > 1, C(i,k) < 0	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.191	818	.525	.863	1768.287**
C(i,j,k);C(i,j)	-.059	818	-.087	.947	13.286**
C(i,j) < 0, C(i,k) > 1	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.038	818	.056	1.259	5.915*
C(i,j,k);C(i,j)	.239	818	.673	1.486	3123.804**
C(i,j) > 1, C(i,k) > 1	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.239	3972	.319	1.076	765.242**
C(i,j,k);C(i,j)	.159	3972	.212	1.297	327.212**
(3-M)					
C(i,j) < 0, C(i,k) < 0	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.004	152	.010	.964	.120
C(i,j,k);C(i,j)	-.176	152	-.473	.829	253.924**
C(i,j) > 1, C(i,k) < 0	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.170	572	.383	.725	439.112**
C(i,j,k);C(i,j)	-.018	572	-.023	.656	.500
C(i,j) < 0, C(i,k) > 1	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.129	572	.170	.778	29.225**
C(i,j,k);C(i,j)	.031	572	.071	1.113	15.453**

C(i,j) > 1, C(i,k) > 1	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.226	2056	.281	.824	264.973**
C(i,j,k);C(i,j)	.096	2056	.119	1.131	45.684**
(3-F)					
C(i,j) < 0, C(i,k) < 0	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.079	676	.259	.770	488.012**
C(i,j,k);C(i,j)	-.039	676	-.128	.721	118.113**
C(i,j) > 1, C(i,k) < 0	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.148	904	.430	.683	1449.706**
C(i,j,k);C(i,j)	-.006	904	-.008	.617	.097
C(i,j) < 0, C(i,k) > 1	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.227	904	.317	.590	185.995**
C(i,j,k);C(i,j)	-.039	904	-.115	1.167	105.925**
C(i,j) > 1, C(i,k) > 1	R	DF	B1	B0	F
C(i,j,k);C(i,k)	.248	2404	.344	.827	582.015**
C(i,j,k);C(i,j)	.132	2404	.183	1.131	158.055**

Table 6 C (i, j) と C (i, k) の水準別 C (i, k) と C (i, j, k), C (i, j) と C (i, j, k), C (i, j) と C (i, k) の偏相関係数

(2-M)			
	R12	R13	R23
C(i,j) < 0, C(i,k) < 0	.073	-.095	.106
C(i,j) > 1, C(i,k) < 0	.210	-.031	.030
C(i,j) < 0, C(i,k) > 1	.189	.024	.019
C(i,j) > 1, C(i,k) > 1	.214	.093	.068
(2-F)			
	R12	R13	R23
C(i,j) < 0, C(i,k) < 0	.126	.095	.259
C(i,j) > 1, C(i,k) < 0	.192	-.063	.026
C(i,j) < 0, C(i,k) > 1	.035	.238	.006
C(i,j) > 1, C(i,k) > 1	.226	.138	.070
(3-M)			
	R12	R13	R23
C(i,j) < 0, C(i,k) < 0	.039	-.180	.197
C(i,j) > 1, C(i,k) < 0	.169	-.003	-.089
C(i,j) < 0, C(i,k) > 1	.133	.043	-.096
C(i,j) > 1, C(i,k) > 1	.221	.083	.049

	(3-F)		
	R12	R13	R23
$C(i,j) < 0, C(i,k) < 0$	.092	-.061	.258
$C(i,j) > 1, C(i,k) < 0$	.149	.017	-.153
$C(i,j) < 0, C(i,k) > 1$	.224	-.004	-.148
$C(i,j) > 1, C(i,k) > 1$	.242	.119	.040

(3)  $i$ が $j$ に対する感情関係と $j$ が $i$ に対する感情関係の $i$ による認知の相関係数および回帰係数

$i$ が $j$ に対する感情関係と、 $j$ が $i$ に対する感情関係の $i$ による認知という二者間の感情関係とその認知の関係を相関係数および回帰係数で示したのがTable 7である。 $C(i, j)$ と $C(i, j, i)$ の相関はいずれの集団においても高い。また回帰係数 $B1$ は正でかなり大、回帰も有意である。

これは、自分が好意的な相手に対しては相手もまた自分に対して好意的であると認知し、自分が非好意的な相手に対しては相手もまた自分に対して非好意的であると認知する傾向が強いことを示している。

Table 7  $C(i, j)$ と $C(i, j, i)$ との相関係数および回帰係数

	R	DF	B1	B0	F
2-M	.646	340	.726	.529	388.997**
2-F	.646	340	.651	.932	251.540**
3-M	.661	238	.734	.638	281.535**
3-F	.552	304	.640	.731	239.878**

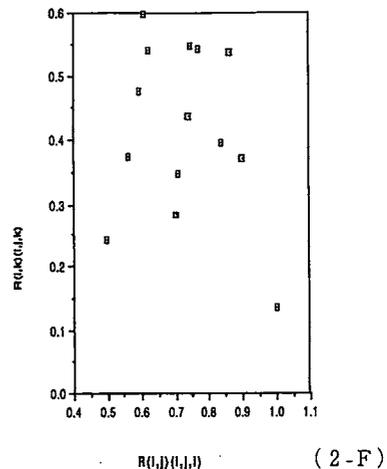
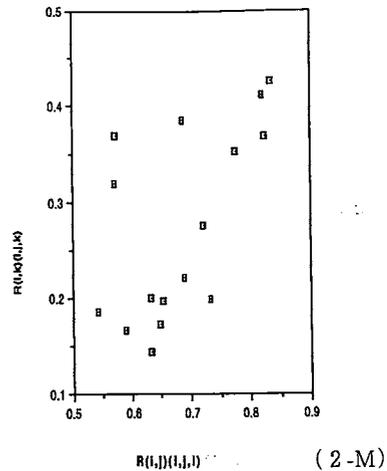
(4)  $i$ が $j$ に対する感情関係と $j$ が $i$ に対する感情関係の $i$ による認知の相関係数および $i$ の $k$ に対する感情関係と $j$ の $k$ に対する感情関係の $i$ による認知の相関係数

ここでは、二者間の感情関係とその認知の関連および三者間の感情関係とその認知の関連を対比してみることにしよう。個人ごとに $C(i, j)$ と $C(i, j, i)$ の相関係数および $C(i, k)$

と $C(i, j, k)$ の相関係数を図示すると、Fig. 3の通りとなる。ここでは、学級内の個人ごとに、両相関係数の顕著なものがプロットされている。殆どの者は両相関が顕著であり、少なくとも一方が顕著とならない者は、2-Mが3人、2-Fが5人、3-Mが1人、3-Fが9人である。

これによると、両相関とも正の者ばかりであるが、 $R(i, j)$  ( $i, j, i$ )が $R(i, k)$  ( $i, j, k$ )に比べて全般的に高い。また、両相関相互が正の関連を示しているが、学級によって相違が認められる。

Fig. 3  $C(i, j)$ と $C(i, j, i)$ の相関係数および $C(i, k)$ と $C(i, j, k)$ の相関係数



考 察

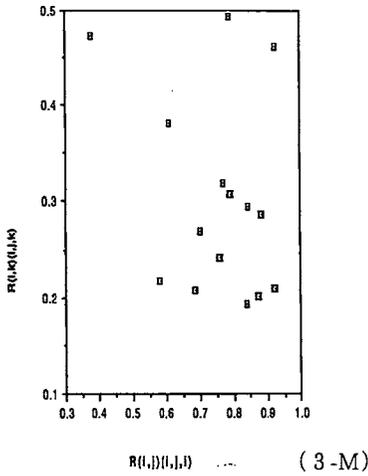
この研究では、学級成員の好悪感情とその認知を分析したが、非好意的感情については、1段階しか評定段階を設けなかったため、好意的感情が3段階の評定をさせたのに比べて、不十分な結果しか得られなかった。これはやむおえない事情によるけれども、今後調査方法について検討しなければならないであろう。

また、この研究では、2学級の男子、女子集団の二者および三者間の感情関係およびその認知の関連について調べたが、集団によって若干の差異が見受けられた。これは学級担任の指導の在り方、学級の雰囲気、インフォーマルな集団の形成、対人的相互関係、成員のもつ競争や協力へ動機等の差異に因ると思われる。これらの要因の影響についてはさらに検討を重ねる必要があるであろう。

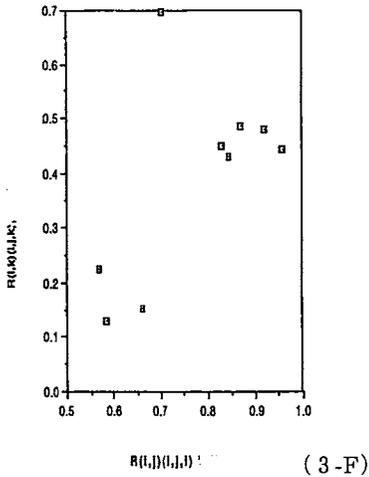
集団内の対人選好システムにおいて、自己の他者に対する感情関係がその認知に影響を及ぼし、その認知も現実の他者の自己に対する感情関係や、他者の他者に対する感情関係を修正し、変容させるであろう。それがまた自己の他者に対する感情関係にも影響を及ぼすというダイナミックなシステムと考えられる。この点についても検討していかなければならない。

個人の感情関係とその認知を多様化させているものとして、認知的バイアスの大小、自己評価と他者評価の傾向、対人関係における利得、報酬、罰、代価に対する態度、競争や協力への動機の強さなど様々な要因が考えられる。これらの個人的特性との関係も検討しなければならないであろう。交換理論等との関係についても考察を加えなければならないであろう。

この研究においては、相互に関連する2者および3者の関係を総合的に調べてきた。しかしこれらの2者および3者の関連は相互に影響し合っていると考えられる。例えば、Davis, J. A. (1963) のいう cross-pressure 条件に類するものが存在するであろう。ある2者および3者



R(1,2)(1,1) ..... (3-M)



R(1,2)(1,1) ..... (3-F)

これらの結果は、三者間関係の認知、二者間関係の認知が、それぞれ自分の感情関係と強く関係することを示し、特に二者関係の認知は、三者関係の認知に比べて、自分の感情関係に強く関わるということを示している。また両相関に関連性があることは、二者間の認知と三者間の認知とも自分の感情関係と深く関わり、その関わり方は連動する傾向がみられることを示すであろう。

関係の変容や緊張の解消が、別の隣接する2者および3者関係に影響を及ぼす。またそれらの緊張の解消が、次の関係に影響するという連鎖的関連についても今後解明しなければならないであろう。

この研究では、二者関係における感情関係とその認知間の関連は、三者間における2変数間の関連よりも強力である傾向がみられた。対人的感情関係においては普通、三者関係は二者関係よりも安定的であるとはいえない。三者関係における感情関係においては、しばしば二者のcoalitionが生じる。coalition理論との関係はもちろん、二者関係と三者関係を如何に統一的に考えるかという問題についての検討は今後に残されている。

（付記）この研究の実施に当たって、金沢大学附属小学校の窪田長世副校長先生はじめ諸先生方のご協力をいただいた。ここに衷心より感謝申し上げる。

#### 参考文献

- Asch, S.E., 1946, Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 41, 258-290.
- Bender, I.E. and A.H. Hastorf, 1953, On measuring generalized empathic ability (social sensitivity). *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 503-506.
- Bruner, J.S. and R. Tagiuri, 1954, The perception of people. In G.Lindzey (ed.), *Handbook of social psychology*, vol. 2.
- Byrne, D. and D. Nelson, 1965, Attraction as a linear function of positive reinforcement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663.
- Byrne, D. and R. Rhamey, 1965, Magnitude of positive and negative reinforcements as a determinant of attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2, 884-889.
- Cronbach, L.J., 1955, Processes affecting scores on "understanding of others" and "assumed similarity". *Psychological Bulletin*,

52, 177-193.

Davis, J.A., 1963, Structural balance, mechanical solidarity, and interpersonal relations. *American Journal of Sociology*, 68, 444-462.

Dymond, R.F., 1949, A scale for the measurement of empathic ability. *Journal of Consulting Psychology*, 13, 127-133.

Dymond, R.F., 1950, Personality and empathy. *Journal of Consulting Psychology*, 14, 343-350.

Festinger, L.A., 1957, A theory of cognitive dissonance. Row, Peterson and Co.

Festinger, L.A. and H.A. Hutte, 1954, An experimental investigation of the effect of unstable interpersonal relations in the group. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 49, 513-522.

Fiedler, F.E., 1964, A contingency model of leadership effectiveness. In L.Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. (1), 149-190

Hastorf, A.H. and I.E. Bender, 1952, A caution respecting the measurement of empathic ability. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 574-576.

Gamson, W.A., 1964, Experimental studies in coalition formation. In L.Berkowitz, ed., *Advances in Experimental Social Psychology*, vol. 1, Academic Press.

Hastorf, A.H., D.J. Schneider and J. Polefka, 1970, Person perception. 高橋雅春訳 1978, 対人知覚の心理学 (キースラー, C.A. 編, 広田君美監修, 現代社会心理学の動向 第2巻)

Heider, F., 1958, The psychology of interpersonal relations. 大橋正夫訳, 1978, 対人関係の心理学.

岩下豊彦, 1964, 対人感情およびその知覚の機制に関する基礎的研究(3): 他者→自己, 他者→他者の対人感情の知覚, *心理学研究*, 第35巻, 57-69.

Jordan, N., 1966, Experimenting with the POQ unit: complications in cognitive balance. *Journal of Psychology*, 64, 3-22.

Jourard, S.M. and P. Lasakow, 1958,

Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 56, 91-98.

Laing, R.D., 1961, *Self and others*. 志貴春彦, 笠原嘉訳, 1975, 自己と他者

Markus, H. and R.B. Zajonc, The cognitive perspective in social psychology. In G.Lindzey and E. Aronson (Eds.), 1985, *Handbook of social psychology* (third edition) Vol.1, 137-230.

太橋正夫, 1956, 選択行動と対人的知覚の研究(2); 他の成員別の成員に対する態度の知覚, *心理学研究*, 第27巻, 193-203.

太田雅夫, 1986, 対人関係の研究; 自己と他者における対人認知の差異について, *金沢大学教育学部教育工学研究*, 第12号, 79-91.

太田雅夫, 1986, 対人関係の研究; 自己と他者における対人認知の差異について(2) *金沢大学教育学部 教科教育研究*, 第22号, 265-270.

太田雅夫, 1991, 集団構造に関する研究; 相互選択集団における重層構造と対人関係を中心として, *金沢大学教育学部紀要*, 第40号, 45-53.

太田雅夫, 1992, 対人関係に関する研究; 3者間における好悪感情とその認知, *金沢大学教育学部紀要*, 第41号, 45-54.

太田雅夫, 1994, 集団内の対人選好システムに関

する研究(1), *金沢大学教育学部紀要*, 第42号, 印刷中

Price, K.O., E.Harburg and T. Newcomb, 1966, Psychological balance in situations of negative interpersonal attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 265-270.

Tagiuri, R., 1952, Relational analysis; an extension of sociometric method with emphasis upon social perception. *Sociometry*, 15, 91-104.

Tagiuri, R., R.R. Blake and J.S. Bruner, 1953, Some determinants of the perception of positive and negative feelings in others. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 585-592.

Taylor, H.F., 1970, *Balance in small groups*. Van Nostrand Reinhold Co. 三隅二不二監訳 1978 集団システム論 誠信書房

Thibaut, J.W. and H.H. Kelley, 1959, *The social psychology of groups*. John Wiley and Sons.

White, P.A., 1958, The computation of eigenvalues and eigenvectors of a matrix. *Journal of the Society for Industrial and Mathematics*, 4, 393-437.